

沖ノ島 奉獻品の紹介

沖ノ島は約 500 年の間、危険な航海で神の加護を求める人々の行く先でした。調査によると、沖ノ島は必ずしも日本と朝鮮半島の間で確立された航路上にあるわけではなく、それゆえ訪れるには特別な努力が必要でした。1950 年頃から 1970 年頃までの一連の発掘調査により、8 万点以上の品々が発掘されましたが、いずれも国宝に指定されており、九州の宗像市の神宝館に移されました。これらの多くは、地元の神に捧げられた奉獻品で、当時の先進的な技術を駆使した異国の素材で作られています。これらの製品はどの国が貿易同盟を結んでいたか、どこで金属加工やガラス製造技術が栄えていたかなど、アジア大陸全体の発展を伝えています。

日本は 6 世紀から 9 世紀に最盛期を迎えたシルクロードの末端だったため、遠くはペルシャのササン朝(224~651 年)の物もここで発見されました。中国起源の銅鏡約 60 枚は、3 世紀から 8 世紀にかけて日本の大部分を支配し、沖ノ島とのつながりが深かった大和朝廷と中国との外交関係を示すものと研究者は推測しています。装飾豊かなものであれ祭祀用のものであれ、それぞれに興味深いストーリーがあります。